

文学作品の解釈と前エディプス期の精神分析理論

田 中 雅 史

はじめに

現代日本の小説には、心の傷を持った主人公がそれとどう向き合っていくかを描いたものがよく見られる。物語の中で、自分の心の深い部分に降りていくプロセスが描かれる。そうした作品を理解するためには精神分析のモデルが有用であり、とりわけフロイト以降に発達した対象関係論や自己心理学などの前エディプス期の内的世界についてのモデルを利用することが効果的であると思える。

現代の精神分析が古典的なフロイトのものと大きく違うのは、前エディプス期の比重が増している点である。現代の日本文学が表現している心理的な内容には感情的に重要な人物に対する喪失感や罪悪感、自己愛の傷やその癒しなどがあるが、こうした点は母親的な対象との融合と分離を軸に考える前エディプス期の精神分析理論と比較することができる。

これまで特にアメリカにおいて、80年代以降にそうした理論の文学研究への利用が行われてきたが、特に対象関係論の臨床における解釈というものが、分析者とクライアントの相互作用に大きく左右されるということもあって、幅広い利用を妨げてきたように思う。ノーマン・N・ホランドやジェフリー・バーマンのように文学研究者として出発し、後に精神分析の訓練を実際に受けた人物でないと、前エディプス期のモデルを使った精神分析的批評というものは数居が高かったのである。

この論文では、そのような困難をいくぶんなりと解消するために、前エディプス期の精神分析理論を、全能的対象からの分離にともなう現象という点から統一的に整理することを試みてみたい。

1 前エディプス期の心の世界と文学研究

文学の精神分析的研究

精神分析はフロイト以降現代まで、文学研究に利用

されてきたが、その利用のされ方はそれぞれの時期に異なった特徴を見せている。まず、フロイト自身のグラディーヴァ論のようなオーソドックスなタイプの精神分析批評がある。これは20世紀の前半によく見られたものである。このような研究では物語で登場人物について書かれている内容を精神分析のケース・スタディのように見なしたり、作品中の言い間違いや男根象徴などに作者の無意識的コンプレックスが表現されていると見なしたりして解釈する。つまり、作中人物や作者を精神分析しているのである。

それから、フロイトの発達段階（口唇期、肛門期など）ごとに特徴的な空想（むさぼる、貯め込むなど）を文学のテキストに見いだす研究がある。口唇性格、肛門性格などの言い方は、かなり一般化しているように思える。これも前エディプス期のモデルの利用には違いないが、この論文で前エディプス期の精神分析理論と呼んでいるのは、20世紀の後半に発達し、80年代頃から文学研究にも利用され始めた別のものである。

自我心理学の発達と共に、自我の防衛機制を作品から読み取ったり、あるいは文学的形式自体を防衛機制と見なしたりする研究が現れた。例えば象徴は偽装、省略は抑圧や否認といった具合である。これは60年代から70年代にかけてである¹⁾。

構造主義からポストモダニズムの時代には、ラカンの理論が使われるようになった²⁾。作者の心理というものを想定せずに、テキストの語りの構造に精神分析を適用するという研究も現れた。またラカン、クリステヴァ、デリダなどの影響で、「作者」を実体としてとらえることが批判され、テキストの語り手と現実の作者を区別するという理論的傾向が生まれた。

ユングの元型論も、よく文学研究に利用される。ユングは無意識を個人を超えた集合的部分も含むものと考え、意識の深みから浮かび上がる元型イメージは調和のとれた全体性に至る変容のプロセスをたどるとした。元型のヴァリエーションは豊富だが、アニマ、アニムス、老賢者、グレート・マザーなど、神話や伝説に出てくるキャラクターに通じるものも多い。これは

作品に現れるイメージを解釈するのに便利なので、元型批評という方法論を生んだ。元型の一つに「影」があり、成熟の過程で統合されていくとされるが、この発想は前エディプス期の精神内界理論と符合する³⁾。

また、ガストン・バシュラールはユング理論の影響で、水や火などの物質に焦点をあてた精神分析的文学研究を行ったが、『水と夢』で論じられている、E・A・ポーの幼時に亡くした母への喪失感を表す「重い水」などから考えると、バシュラールの本は物質に投影された前エディプス期の心理の研究として読み直し得るものである。

ユングやランクなどの精神分析の黎明期におけるフロイトの協力者の理論を使ったものも、広義の精神分析的文学批評にあたるが、現在精神分析と呼ばれているものには、フロイトの娘であるアンナ・フロイトの自我心理学の系統、オーストリアからイギリスに渡って多くの協力者と共に対象関係論の基礎を築いたメラニー・クラインの系統（中間派と呼ばれるウィニコット、独自の展開を見せたビオンも大きくいうとこれに含まれる）、それにフランスのラカン派などがある。その中で、自我心理学とラカンの理論にも前エディプス期に関係する部分はあるが、前エディプス期という自我が未発達の時期の心のモデルを発展させたのは、主に対象関係論およびアメリカでハイッツ・コフートが体系化した自己心理学である。次にこれらを使った文学研究について見てみよう。

前エディプス期の心理学を使った文学研究

20世紀の半ばから後半にかけて、前エディプス期に焦点をあてた精神内界理論は大きな進歩をとげた。メラニー・クラインの対象関係論は、カーンバーグなどの理論家によって自我心理学のマーガレット・マラーの発達モデルと結びつけられ、三歳ぐらいまでの幼児の精神内界で生じている「良い」対象と「悪い」対象の統合、平たく言うと心の影の統合のモデルが成立し、心理臨床に広く使われるようになった⁴⁾。コフートは70年代から次々に発表した著書によって、自己愛（ナルシズム）についてのそれまでの見方を大きく変え、早期幼児期の自己愛の傷がもたらす影響についての理解を深めた。

こうした精神分析理論の成果は、当時から文学研究に影響を与えてきた。ノーマン・N・ホランドは20世紀後半の精神分析批評を概観した論文の中で次のように言っている。

80年代と90年代の今日、私は精神分析は自己（the self）の心理学になったと信じている。もっとも、異なる学派が自己に目を向けるやり方には大きな違いがあるが。イギリスの対象関係論、コフートの自己心理学、あるいはラカンの言語的精神分析への回帰などである。これらの人口に膾炙したアプローチのどれかを利用した、ヴァリエーションに富んだ多くの文学研究の論文が存在する⁵⁾。

それが実際にどのようなものであるかを、いくつかの例で見てみよう。

ジェフリー・バーマンの『ナルシズムと小説』はコフートやカーンバーグの理論を使って、ドリアン・グレイやチャタレー夫人などの虚構の登場人物の精神分析的研究を行っている。バーマンもノーマン・N・ホランドも、英文学を専攻し、後に精神分析家としてのトレーニングも積んでいる人物である⁶⁾。

メレディス・アン・スクラの『精神分析的過程の文学的使用』は対象関係論やラカンを使って物語の登場人物や作者の精神分析を行ったり、物語る行為を精神分析過程と比較したりしている⁷⁾。

作者や登場人物の精神分析に使うだけでなく、作品が読者の無意識的幻想に訴えるプロセスを前エディプス的な「中間領域」（ウィニコット）という概念で理解しようとすることも試みられた。ウィニコットに関しては、一九九三年に『移行対象と潜在空間 D・W・ウィニコットの文学的利用』という論集が出ている。ウィニコットやボラスのような精神分析家と編者のルドニツキーのような文学研究者の両方から、ウィニコットなどの精神分析理論と文学研究の接点が探られている⁸⁾。

フェミニズムの批評でも、対象関係論を使った研究が多く現れた。それは「対象関係論の精神分析において理論化されたパーソナリティー構造 the personality structures の反映を、女性作家たちのテキストのうちに看取する」ということなので、前エディプス期のモデルを利用した研究であると言える。具体的には「女性の伝統の編成、女性が作者であることと女性の署名 female authorship and the female signature、女性性を表わすプロットの構造、女性の登場人物の間の結びつき、とりわけ母と娘の間の・姉妹同士の・そして友人同士の結びつき（後略）」というものだ⁹⁾。

日本でも近年、心理臨床や、さらには依存や嗜癖の問題と絡める文学研究が増加しつつあるように思える。

いくつかあげると、近藤裕子『臨床文学論：川端康成から吉本ばななまで』（彩流社、2003年）、岩宮恵子『思春期をめぐる冒険 心理療法と村上春樹の世界』（日本評論社、2004年）、森岡裕一『飲酒／禁酒の物語学—アメリカ文学とアルコール—』（大阪大学出版会、2005年）などである。

前エディプス期の精神内界理論を使ってはいないが、実質的にそれに相当するポイントを突いている研究が、実は相当数日本にはある。それは退行的な幻想文学を好む人々によるもので、たとえば堀切直人『日本夢文学志』、中谷克己『母体幻想論』などである¹⁰⁾。

このタイプの評論は総じて前エディプス的な母子一体感への憧れるという姿勢で書かれている。江戸川乱歩や澁澤龍彦などの作家にも幼児期の全能感への惑溺といった傾向はあり、その意味では文学や芸術における前エディプス的なものの分析というのは、幻想文学研究の伝統とつながっていると言える。

前エディプス期の理論と文学作品の解釈

対象関係論や自己心理学などの前エディプス期の精神内界理論は、ここまで見てきたように現代の精神分析において重要なものであり、文学や芸術の研究への応用も試みられてきたものである。日本では欧米に比べて文学研究への応用が少ないように思うが、それでも近年、「自己」や「私」、さらには依存や嗜癖の問題と絡める文学研究が増加してきている。自己の不安定さが目立ってきた現代という時代であって、そのような研究の必要性が増してきたということだろう。

その需要に応えるためには、前エディプス期の精神内界理論を、文学をはじめ芸術作品の研究に役立てやすいようにする工夫が必要であると筆者は考える。なぜなら対象関係論や自己心理学の文学研究への応用には、本質的な困難さがあるように思うからである。

対象関係論などの臨床においては生身のクライアントがいて、人間である分析家との間に転移、すなわち過去の重要な人物との関係の再現が起こる。古典的なフロイト派の分析が幼児期の親との関係などの過去の記憶を再構成することに力を注いだのと異なり、現在では分析家との間に「今、ここ」(here and now)で進行している転移状況を解釈し、その反応によってクライアントの精神内界の状況を判断するのが中心になっている。つまり、分析家との相互関係を離れては病理を解釈しない傾向になっている。

文学作品は人間のように生きてはおらず、言語構造物として固定した形態を持っているので、「今、ここ」

の転移によって分析する側のアプローチに反応を返してくれるわけではない。受容美学や読者反応批評のように読者の反応も含めて「作品」とであるという考え方もあるが、そうした方法を使ったところで、臨床場面のような相互作用の中で作中の前エディプスの特徴をとらえるというのは難しい。

このような違いを踏まえた上で、文学作品の前エディプスの特徴の理解に役立てるために、対象関係論などの教科書にあるような整理の仕方とは若干違った角度から前エディプス期の心の世界について整理してみることが有効ではないかと思う。精神分析の本は主として未来および現在の精神分析家や心理療法家に向けて書かれているので、治療がうまくいくためにどうするか、たとえばどんな順番で進めたら効果的か（治療機序）などを詳しく説明することになる。また各流派は違った用語を用いたおおむね自己完結的な体系であり、その範囲内で有効性を持っているが、違った流派間——たとえば対象関係論と自己心理学、ユング派と自己心理学など——に橋を渡すのはそれを試みる分析家にとっても簡単ではないようだ。

文学作品の前エディプスの特徴をいかに理解するかという視点に立つと、治療的な細部や理論家や流派ごとの違いなどにこだわるよりも、前エディプス期に進行しているプロセスについて共通部分を中心に大きくまとめるような整理の仕方の方が有用だと思われる。それを土台にして具体的な個々の作品やイメージについて考えるのである。もっとも、それぞれの精神分析理論の細部についても、できる限り正確を期すようにしたいと思う。

2 全能的対象からの分離という点から見た前エディプス期の内的世界

前エディプス期の同一化

まず前エディプス期とそこで生じている同一化(identification)という基本的なところから見ていこう。

精神分析では、特に幼児期に起きるとされる自分の親との同一化を重視している。フロイトの言う「エディプス・コンプレックス」とその解消である。主に男の子の場合に父親とどのように同一化し、自分が男性であるというアイデンティティを持つかが示されているのだが、女の子もこの時期に自分が女性であるというアイデンティティをもつとされている。フロイト以後の精神分析理論の展開の中で、このエディプス期より前の、三歳ぐらいまでの時期である前エディプス期の

幼児の内面というものがクローズアップされていった。この時期に起こるのが、前エディプス的同一化である。

前エディプス期の幼児は母親などの養育者にべったりと世話をされている状態から、一人で行動するようになっていく。この母親からの分離ということが、前エディプス期において最も重要かつショックな過程である。なぜならそれは幼児の心の中では、自分と一体となっていた「完全な存在」を喪失する体験と受け止められるからである。その喪失感を受容するという前エディプス期の課題の鍵となるのが、幼児を抱えて精神的・身体的に支える機能、ウィニコットのいう「抱えること」(holding)である。前エディプス期の幼児の心の発達には、「抱える」機能を取り入れて喪失感と向き合うプロセスと言える。母性的な「抱える」機能の取り入れが、この時期の同一化の主要なものなのだが、もう一つ重要な同一化として、投影同一化というものがある。

幼児はまだ自我が発達ないので、不快な感情は保持することができない。そうした感情は「悪い」ものとして「自分」という領域から切り離され、外部に排出されるという。(この「悪い」は道徳的な善悪を指しているのではなく、幼児の主観においてそう判断されるという意味なので、括弧つきで書いている。)このとき外に排出される部分は「自分でない」ことになるのだが、自他の未分化な状態なので、自分の一部でもあるという複雑な存在の仕方をする。したがって切り離れた「悪い」部分は投影した相手と同一化する(ただしそのことに自分では気づけない)ことになり、結果的に自分でも意識せずに相手を操作する手段となる。これが投影同一化である。

この二つの同一化、「抱える」機能の取り入れ同一化と「悪い」自分の投影同一化は、幼児期の精神内界を発達させるための柱である。このあたりのモデル化の仕方には精神分析の流派によって違いがあるが細部にはあまり拘泥せず、手がかりになりそうな部分を中心にもう少し詳しく見ていこう。

対象と内的対象

エディプス期以降は父、母、自分、それから兄弟姉妹や家族以外の人でもいいが、こうした人々は、それぞれ独立した人格を持った人物であると認識され、そうした人物の間にいろいろな関係が生まれるとされる。精神分析で「対象」(object)という時には、こうした自分と区別された相手を指す。自分と対象は分離したものであるわけだ。(ラカン派のいう対象の場合は

別だが、これについては後で少し触れる。)

前エディプス期の幼児、だいたい三歳ぐらいまでの幼児の心の場合、この「自分」にあたるものが育つ過程にある。自我が発達過程にあり、まだ脆弱なのがこの時期だ。「自我」というと、精神分析では狭い意味では、現実を把握する機能をもつ心の一部分のことを言う。フロイトの考えた心のモデルでは、無意識の本能的な部分であるエス(またはイド)と外部の現実との間を仲介する役目を果たするのが自我である。しかし、もう少し広い意味での自分を指す「自己」という言葉と区別せずに自我という言葉を使う場合もある。

生まれたばかりの赤ん坊にとって母親と自分とは一体と感じられていて、そこから徐々に自分と母親が別々の存在であることに気づいていくとイギリスの小児科医であり精神分析家でもあるウィニコットは考えた。この時期は、自我はまだほとんど見られない状態である。不快なことがあってもすぐに母親などの養育者が対応するので、幼児は自分が全能で、望みはすぐかなえられるという錯覚を持つ。こうした全能感はその後少しずつ、母親などの養育者が「完全な対応」に失敗し、幼児が自分の意に沿わない現実の存在に気づいていくことによって醒めていくとウィニコットは述べている。

対象関係論(クライン派)では、こうした原初的な幼児の主観において、快いものや不快なものが空想という形で現れると考えられている。たとえば世話をうまくしてもらって気持ちいい場合には、それが「良い」空想的イメージとなり、逆の場合は「悪い」空想的イメージとなる。この空想の原因としてフロイトのエロス(生の本能)とタナトス(死の本能)とか、養育者の世話の失敗とか、幼児の生得の素質によるものとか、様々な議論があるが、ここではこの何が原因かという話に深入りはしない。メラニー・クラインは、幼児がこうしたイメージをきわめて具体的に、まるで「良い」ものや「悪い」ものが実際に体内にいるように感じると考え、こうした無意識レベルの空想を内的対象と呼んだ。

つまり、対象関係論で精神内界の「対象」と呼ぶのは、前に述べたような独立した人物ではなく、愛着や攻撃性を感じさせる主観的な想像物のことである。エディプス期以後の場合は、自分とは分離して存在する相手というものを認識し、それに主観的な印象が重ねられる。つまり対象と内的対象はおおむね一致している。しかし、大人でも誰かに対して、あるときは大変いい人のように感じ、別の時には全く逆に感じるよう

な場合、その人物に対して異なる内的対象を投影していると考えられる。

一方、幼児の場合には大人の場合の現実的な対象、自分と区別された外部の世界というものがまだできあがっていない。また人間という統合された全体のイメージもないので、この時期の内的対象は「部分対象」(part object)と呼ばれている。メラニー・クラインの有名な良い乳房と悪い乳房などが、その代表的な例である。

スプリット

このように、この時期の幼児の心の中では、快や不快とむすびついた内的対象があるのだが、そのうちの「悪い」対象の方は、前に投影同一化の説明で触れたように、まだ未熟で弱い自我を守るために「自分」という領域から区別される。これを分裂(スプリット)という。「悪い」内的対象は、ごく初期の幼児の心の健康のために、スプリット・オフ(分裂排除)されることが必要だ。

そうした分裂の空想は、まだ弱い自我を「悪い」対象から保護するために必要不可欠のものである。しかし、このような防衛手段は、いつまでも続くものではない。自分は絶対的に良くて、自分以外は絶対的に悪いという見方に固執することは、現実的な判断をする健全な自我の成長を妨げるからである。また、こうした防衛手段をとることで、逆に自分の中にあるネガティブなものをすべて合わせたような、非常に恐ろしい外部ができあがって、自分に襲いかかってくると感じられるようになる危険もある。なので、やがて自我が十分それに耐えられるだけ強まると、「悪い」側を再統合することが必要になってくる。

ウィニコットやメラニー・クラインは、生後数ヶ月で幼児が離乳をする際に、「悪い」対象を統合すると考えた。マーガレット・マラーは、子どもが母親から離れて一人で行動できるようになる二、三歳ぐらいの時期にも、同じような内的プロセスが起こると考えた。いくつかの段階を経て、前エディプス期にこうした「悪い」対象の統合が行われていくのである。

この統合の際に「良い」対象の側の助けが重要になる。これは現実世界では母親などの養育者の世話に当たるが、いくつかの理論に触れながら、それがどういうものか見ていこうと思う。

「抱えること」と前エディプス的な不安

ウィニコットは母親が赤ん坊の世話をする機能を

「抱えること」(holding)と呼んだ。文字通り赤ん坊を抱っこして世話をするのだが、赤ん坊が気持ちよくいられるように周囲の環境を整えることも「抱えること」に含まれる。食欲などの赤ん坊の本能の満足を満たすだけでなく、赤ん坊に関わって自我が育っていく助けをすることもそうである。「抱えること」には単に心地よくて退行的な状態というだけでなく、環境を整えて母子の分離を促すという要素も含まれる。

この「抱えること」という概念をさらに深めたのがピオンである。ピオンは幼児がスプリット・オフしなければならない「悪い」対象を、母親が「包容する」(contain)という。何か赤ん坊が不具合を感じているような場合に、それが母親に伝わる。「悪い」対象が投影同一化されたわけだ。それを母親は「包容」する。抱っこしてあやしたりもするだろうが、ピオンのいう「包容」は身体的な抱えというよりも心理的な消化作業のようなものだと考えればいだろう。赤ん坊が自分では処理できない不快な感情をかわりにかみ砕いてまた戻してあげるのである。ピオンはこれを「容器と中身」(container and contained)と呼んだ。あるいは、これをさらに抽象度を上げて、赤ん坊の中に生じる言語化できない不充足感をベータ要素、それを抱える機能をアルファ機能と呼んでもいる。

幼児が自分では保持することのできない不快な体験の要素は、母親のアルファ機能によって耐えうるものに変えられ、また幼児に戻される。その結果、不快な体験はスプリット・オフされることなくアルファ要素として認識可能となり、思考が生じる。思考は「不在の乳房」(the absent breast)の代替物であり、ピオンはこうした認識を「K」(know 知ること)という記号で表し、分析場面での交流において重視した。アルファ機能が不十分であれば、このサイクルは成立せず、ベータ要素はベータ要素のままなので幼児はそれを吐き出し続けるという逆転状況が生まれる。そうした状況をピオンはアルファ機能の逆転、マイナスのKなどと呼んだが、それによって自我に統合されないベータ要素の塊が生まれる。母親や部分対象としての乳房の「不在」は、まるで自分を脅かす実在物のように感じられ、現実と想像の区別がつかないことから現実の経験から学ぶことができない。恐怖は思考からすり抜けるので、存在はするがつかみどころのない「言いようのない怖れ」(nameless dread)となる。

このピオンの包容やアルファ機能の理論からわかることは、重要なのは母親の不在、母親からの分離などの不快さを認識できるようになることであり、そのた

めに「悪い」内的対象の投影同一化と「良い」内的対象や「抱える」機能の取り入れ同一化が一連のサイクルを形成しているということである。ベータ要素（「悪い」対象）を処理できない幼児は、それを母親に投影同一化する。母親の中に幼児の行動などによって、モヤモヤした意味化できない感情が生じるのだ。母親はそれを我慢して「抱え」る。別の言い方で言えば、それを抱える容器となって「包容」し、アルファ機能によってアルファ要素に変えて、幼児の中に戻してあげる。これは幼児の内界から見ると、「良い」対象や「抱える」機能を取り入れ同一化することになる。こうした一連の流れによって、幼児の心は切り離れた自分の「悪い」部分を統合し、意識できるようになる。

自我が強まり、自分という感覚が確かなものになっていく過程で、このようにビオンのモデルなども含めた広い意味での「抱える」機能というものが、大きな役割を果たす。それはまだ弱い自我に代わって、内部に生じた「悪い」対象をほどよいものに変える働きをする。怒りや不安などの感情が、主観的には「良い」対象、現実的には周囲の母親などの養育者の世話によって、なだめられ、認識可能になるのである。そのようなプロセスが繰り返されることで、幼児は自分の中に、ネガティブな感情を「抱える」機能を取り込んで、自立していく。

投影同一化の悪循環

一方で、養育者がうまく対応できないことが続くような時、「抱える」機能の取り入れではなく、「悪い」対象の投影同一化が悪循環を起し、ビオンのいうマイナスKという悪性の投影同一化の状態になる。自己イメージと混じり合った「悪い」対象が外部に投影同一化され、外部の世界は迫害的なものへと変貌する。それは心に取り入れることができないので繰り返しスプリット・オフされ、より凶悪な対象となる。

こうなると、分裂排除された「悪い」対象の統合はできないので、非常に強い不安が生じる。この不安は精神分析の流派や分析家によって様々な表現で形容されている。ビオンはアルファ機能などによって悪性の「不在の乳房」が在るという非現実の感覚が処置されない場合は、悪化して「言いようのない怖れ」を感じるというが、それ以外にも、ウィニコットは母親から離れた赤ん坊が感じる破滅不安ということを行っているし、自己心理学のコフトは、自己愛的な人物がストレスに曝された時の特有の状態、自己の断片化の不安と自己愛憤怒というものについて述べている。

精神分析でこうした激しい不安というと、古典的な理論では去勢不安というものがある。これは男性器を切られるという不安だが、父親と母親を争って罰せられるのを恐れる気持ちから生まれるとされる。フロイトは「不気味なもの」の中で、ドイツロマン派の作家であるホフマンの『砂男』を去勢不安の表現として分析した。

『砂男』の主人公ナタナエルは、子どもの頃に会った不気味な人物であるコッペリウスを子どもの目を奪う妖怪である砂男だと思う。それ以来、ナタナエルには目玉のない顔にぼっかりと口を開いた暗い穴のイメージが付きまとう。この目玉を取り去られる不安を、フロイトは男性器を切り取られる不安と解釈し、彼の考えたエディプス・コンプレックスがよく現れていると解釈したのである。

現在の目で見ると、『砂男』は前エディプス的な状況が、よく表れている小説であるように見える。ナタナエルの自我は脆弱で、人物の同一性には著しい混乱が見られる。コッペリウスは成長後のナタナエルの前にコッポラという人物として現れるのだが、この二人が同一人物なのかどうか最期まで曖昧である。ナタナエルは途中で物語を作って恋人に読んできかせるが、その物語は彼自身の破滅を予言するような内容になっている。つまり内部と外部に混乱が見られる。ナタナエルは突発的に奇妙な振る舞いをして、自分や他人を傷つけがちだ。

ナタナエルのこだわっていた「暗い穴」は、去勢の傷というより投影同一化された内的な不充足感、ビオンのいうベータ要素にあたると思われる。ナタナエルはそれを外部に投影し、人形のオリンピアによって抱えてもらおうとするのだが、その脆弱な支えはすぐに崩壊し、内部と外部が交錯したような世界でナタナエルは狂気に陥る。

メラニー・クラインは自他が未分化でスプリッティングに頼っている心の状態を「妄想分裂ポジション」と呼んだ。パラノイド・スキゾイド・ポジションの訳で、頭文字を取ってP Sポジションとも言う。これは幼児にとって必要な段階だが、投影同一化された「悪い」対象が「抱え」られずにいると、『砂男』のように悪性のものと化したP S的な世界が生じる。

20世紀後半に心理臨床の分野で境界性パーソナリティ障害についての研究が進んだ。このタイプの人の精神内界では、いま述べたようなP S的なプロセスの悪化が生じていると考えられる。そのため「良い」部分と「悪い」部分のスプリッティングは統合されず、同じ

人に「良い」部分と「悪い」部分を交互に投影（もしくは投影同一化）して、しがみついたり攻撃したりするといった不安定な行動を取るようになる。

自己愛の障害

同じように20世紀後半に研究が進んだものに自己愛性パーソナリティ障害がある。これはコフートの自己心理学によってその独特の精神内界構造が明らかにされたものだ。

フロイトの精神分析から自己心理学という理論を作り出したコフートは、人間の心すなわち自己を、野心と理想という二つの極をもつ構造と考えた。コフートはオーストリア出身のアメリカの精神分析家だが、野心と理想を強調するこの自己のモデルはたいへんアメリカ的な印象を受ける。しかし、ここでいう野心というのは、人に賞賛されたいという気持ちで、元をたどると子どもの頃母親にほめられてうれしかった体験などに通じるものだ。こうした体験は自分が母親という鏡に映されて認められているようなものなので、ミラリング（「鏡映」「映し返し」などと訳される）と呼ばれる。一方、理想の極のほうを、父親的なものと見ることができると。

コフートの考える「自己」は、フロイトの考える独立した装置のような心とは違い、周囲にいて反応してくれる他者との関係性の中で存在するものである。その支えとなるものを、彼は「自己対象」(selfobject)と呼んだ。自己が安定（コフートの言葉でいうと凝集）しているための支えとなるような対象という意味でこう呼ばれているのだが、この名称から連想されるように、これは外部の存在する対象ではなく、自己と対象がはっきり区別されないような状態で存在している内的対象の一種と見ることができると。誰かを理想化したり、誰かからミラリングを受けたりする時に心の中に生じる体験が、自己対象である。

自己心理学では、前に見た心の成長のサイクルにあたるものを、幼児が感じた不快な体験を「良い」対象にあたる自己対象が共感（empathy）という形で処理するプロセスと見ている。「悪い」対象の存在という概念はなく、母親的对象の共感不全が引き起こす自己の断片化という状態があるだけだと考えるのだが、指しているものは重なっているから、ここでは関連づけながら見ていこうと思う。

幼児の中に生じた「悪い」対象（自己の不全感、断片化）が母親的な「抱える」機能によって（自己対象の共感によって）処理されて自我に統合され（自己の

安定が得られ）ない場合に起こるもう一つの状況は、コフートの自己心理学によって示されたような全能の原初対象への防衛的しがみつきの状態である。

コフートの自己心理学が明らかにしたナルシズムの構造は、ナルシズムがリビドーを自我に向けた現象だとするフロイトのナルシズム論とは全く逆のものになっている。フロイト的には自己愛者は、いつてみれば自分だけを愛する人物である。しかしコフートの考えでは、病的な自己愛者というのは自分だけを愛する人物ではなく、自己対象とのほどよい関係（「抱える」機能の取り入れ同一化と言ってもいい）がうまく築けなかったために「悪い」部分も含んだ自分や相手を受容することができないまま成長してしまった人物なのだ。当たり前前の現実の自分を愛せないからこそ、全能の完全な自分という幻想に固執するのである。

投影同一化の悪循環にみられるような恐怖は、このタイプの人には見られない。しかしそれも完全な対象と融合した自分という幻想にしがみついている間だけで、その防衛が壊れれば自己が断片化した恐慌状態に陥る。この種の「完全さ」へのこだわりは、村上春樹の作品によく見られると思う。コフートが明らかにしたような自己愛的な人物は、自分の中にあるマイナスの部分の内省することができない点で村上春樹作品の主人公達とは全く違うのだが、『世界の終りとハードボイルド・ワンダーランド』に出てくる「完全な街」や「完全な壁」のような表現は自己愛的な心の構造と関係があると思われる。

P S ポジションとD ポジション

ここまでは「悪い」対象を「抱える」ことで統合可能なものにするという母親的な機能と、それが機能しなかった場合について考えてきた。投影同一化の悪循環に飲み込まれたようなP S的な世界を克服する力になるのは、「抱える」機能の内化だ。いわば〈母親〉を内部に取り込み、同一化したような形である。このことは、それまで空想の中に「良い」と「悪い」に分裂している全能の母親がいて、それと分かちがたい形で存在している自分がいるという融合状態から、それぞれ独立した自己および対象イメージがある状態へと心の中が変化することでもある。この変化に伴い、全能の対象と一体になっているという快い想像を手放さねばならないのだが、それは不快であり、また恐ろしいことでもある。その恐ろしさは切り離され、外部に投影同一化されるのだが、そのことは妄想的な世界に通じるものだ。広い意味での「抱える」機能がそうし

た不安を和らげて、自分とは異なる相手である実在の対象との関係の中で、不快な感情を受けとめ、それに耐えながら生きる力を発達させる。

結果的に、「抱えること」は一種の分離をもたらすのだが、その分離は投影同一化されたものとは違い、認識され受容された分離である。このプロセスをウィニコットは「脱錯覚」(disillusionment)と呼んだ。ディスイリュージョンメントとはイリュージョン(幻想)から脱することなので、普通の日本語に訳すと「幻滅」になる。いい意味で幻滅することが、自律性を持つために不可欠なのである。

メラニー・クラインは「悪い」対象を分裂排除せず、それを自分の一部として認めることのできる心の状態を抑鬱ポジションと呼んだ。妄想分裂ポジション(P Sポジション)と並ぶ、対象関係論における心の構造モデルである。英語ではデイブレッシヴ・ポジションなのでDポジションとも呼ばれる。「妄想分裂」同様「抑鬱」も言葉の響きからの連想が強く働くので、ここではDポジションという表記を使おうと思う。Dポジションでは全能の対象に対する喪失感を感じ、それを受け入れるという心の作業が行われる。これはフロイトが喪の仕事と呼んだものである。精神分析では葛藤に時間をかけて向き合い、克服する作業を「ワークスルー」(徹底操作)というが、二者関係におけるDポジションのワークスルーは三者関係におけるエディプス・コンプレックスのワークスルーと表裏一体だと考えられている。次に前エディプス期における父親イメージも含めた三者関係について、見てみよう。

3 前エディプス期の精神分析理論における分離をもたらす第三項

前エディプス期の父親的な対象

対象関係論(クライン派)、ウィニコット、ピオン、マラーなどは、母子という二者関係を中心に前エディプス期の内界をモデル化している。こうしたモデルでは前エディプス期の同一化は現実の人物でなく主観的想像物としての対象との間で起こること、エディプス期の同一化は実在する人物としての対象、それも父-母-自分という三者の間で起こることというふうに区別して考えるようだ。内的対象と対象を区別しているわけである。しかし、エディプス期の問題が、実は前エディプス期の問題と深く関わっていることがある。また、前エディプス的な分離の不安を乗り越える時には、抱えてくれる対象からの「良い」作用だけでなく、

分離をもたらす第三の対象からくる作用が関わっているとも考えられる。特に文学作品などで描かれる状況は純然たる二者関係ではないことが多いので、ここで前エディプス期において第三の力として父親的な対象が関わる場合について見てみよう。

対象関係論ではエディプス・コンプレックスの先駆形態が前エディプス期に見られるとされている。といっても、父や母という独立した人物のイメージはまだないので、部分対象としての乳房や性器などからなる父-母-自分の関係である。この時、父と母の混ざり合ったような迫害的内的対象である「結合両親像」というものができるという。これは自分にとって重要な愛着対象が他の存在と結びついている苦痛を受け入れていく心の作業を導くものである。三者関係の原型であり、また超自我の原型ともされているが、二者関係との違いはそれほどはっきりしていないし、この「結合両親像」という内的対象自体が、心を支える何らかの基準を提供してくれるわけではない。

コフォートは幼児が原初的な融合状態から分離する際に、自分が受容されるという野心の極の元になる反応を十分得ることができなかったとしても、父親などとの関係で理想の極がそれなりに作られていれば、そちらの構造をもっと確かなものにする事で心の安定に導けると考えた。つまり前エディプス期における「抱える」機能の同一化に必ずしも頼らない形で、父親的な対象との関わりから自己の基盤が作られる道を示している。

しかし、コフォートの父親的な自己対象は、自己対象という言葉が示すように融合的なニュアンスがある。その意味では「抱えること」からあまり隔たっておらず、マスターソンが言うように二者関係のままだとも言える¹¹⁾。

父親的な対象と言語

フランスのラカン派の精神分析では、前エディプス期とエディプス期の違いを、言語の習得という点から考えている。単に言葉を覚えるというだけでなく、ソシュールのというような恣意的な構造として分節された言語のもたらす意味作用の場に主体が組み込まれているかどうかという違いである。これまで見てきたようなクライン派などでは、エディプス期に成立する「対象」は人だったわけだが、ラカン派ではこのような構造としての言語の作り出す領域が「対象」に相当する。もっとも、これをラカンは対象と呼ばずに〈大文字の他者〉と呼んだ。記号でAと表記するが、Aはフラン

ス語の「他者」(autre)の頭文字である。主体はこの言語の領域で対象と関わるのだが、それは实在の何かではなく言語のもたらす効果でしかないような対象である。ラカンはこのように、フロイトの考えたエディプス・コンプレックスと去勢を、言語による意味作用の世界である〈大文字の他者〉へと置き換え、主体が組み込まれるそうした世界を「象徴界」(サンボリック)と呼んだ。これがエディプス期以降の世界だとすると、前エディプス的な、非言語的で空想的な対象はどうなっているかという点、ラカンはこれに相当するものを対象 a と小文字で表している。

対象関係論などのモデルとラカンのモデルは、共にフロイトの理論をもとにして平行して発達した別の体系である。だから、クライン派などの内的対象と対象 a が正確に同じものとは言えないが、ほぼ対応する位置にある。ラカンはメラニー・クラインやウィニコットを引き合いに出してその違いという点、ラカン理論の優位を述べている。ここでは双方の細かい比較や優劣については触れないが、文学研究との関連で言えばラカンの理論がよく使われているのに比べ、ラカンの時代からすれば大きく進歩しており、また現代の自己の不安定さが目立ってきた時代を分析する道具として優れたものである対象関係論やコフォートの自己心理学などの精神内界理論があまり利用されていないのはバランスが悪いと思う。

そうした中で、ジュリア・クリステヴァの理論は重要なものだ。クリステヴァはメラニー・クライン、ウィニコットなどを参照しながら、ラカンの理論を元に独自の理論を作り出し、前エディプス期の精神内界モデルを文学や芸術の分析に利用しているからである。

クリステヴァの「想像的な父親」とオブジェクト

クリステヴァは前エディプス期における分離の問題を、「抱える」母親と幼児の二者関係だけでなく、そこに彼女のいう「想像的な父親」(père imaginaire)との同一化という要素を入れて考えている。「想像的な父親」というのは、言語習得以前の混沌とした世界から「象徴界」へ移行する時に重要な役割を果たすものだという。内的世界と外的現実(ラカンの場合は「象徴界」)との中間に位置しているという存在の仕方はウィニコットのいう移行対象に近いと思うし、クリステヴァもそれを意識しているようだが、移行対象が母親の代わりであるのに対して「想像的な父親」はその名の通り父親的な第三項である。

すでに見たように、前エディプス期は全能の母親と

いう想像の存在からの分離を筆頭とする受け入れがたい体験を、いったん投影同一化という形で誰かに預け、その後「抱える」機能と共に戻してもらうことで自我に統合するプロセスが起こる時期である。そこには幻滅(ウィニコットの言葉で言うと脱錯覚)が含まれる。これは母親と幼児との二者関係において進展すると考えられている。対象関係論や自己心理学でも前エディプス期の内界にある父親の対象について論じているが、それも二者関係のヴァリエーションと考えられる。

それに対して、ラカンの理論では「父」という第三項を強調する。分離や幻滅をもたらすのはこの第三項なのだが、それをラカンは「ファルスへの母の欲望」という独特の用語を使って表現している。幼児と母の融合状態に亀裂がはいるのは、「ファルスへの母の欲望」によって、母が自らで充足した完全性をもったものであるという幼児の幻想が剥がれ落ちるからである。つまり、「ファルスへの母の欲望」はウィニコットのいう脱錯覚と内容的に重なる部分が大いなのだが、それを二者関係でとらえるか第三項を導入するかという点が違っている。

あるいは「ファルスへの母の欲望」はさきほどの「結合両親像」とも似ているが、ラカンのほうではそこから幼児が母の欲望の対象であるファルスへ同一化する結果、前エディプス的な主体と対象の関係とは異質な関係へ、つまり主体とは「非対称的な」言語の領域へジャンプすると考えると、二者関係と三者関係の違いという点からは大きな差があると言えるのである。

ラカン理論では、このように「ファルス」は言語の場である「象徴界」や、そこに至るために去勢を迫る「父の名(「名前」と「禁止」の両方をかけている)」(Nom-du-Père)という父親的機能につながる原-対象、原-シニフィアンとでもいべきものである。そうした「象徴界」への移行の手前に位置づけられるのがクリステヴァの強調する「想像的な父親」であるが、これを描写するクリステヴァのトーンは一定していない。「母」と「その欲望」が凝固したものというように、母子一体状態からの脱錯覚という面を強調した表現をすることもあれば、キリスト教のアガペー(神の愛)になぞらえることもある。だが、いずれにしる厳しい分離をもたらすと同時に、抱える優しさもある内的対象との同一化を、クリステヴァは彼女がオブジェクトと呼ぶ主体を圧倒するような陰鬱さを乗り越える鍵と考えたのだろう¹²⁾。

「オブジェクト」(棄却されたもの、おぞましいもの、

などの意)とは、原初的な融合状態から締め出されることで生じる内的な極度の不快感のことである。幼児はその母子一体感の残骸とでもいふべき嫌なものを「棄却」するのだが、これは主客が分離し、統合された全体的対象が成立する以前のことである。

それ以前に(時間的観点から言ってもまた論理的にも)、対象でないとしても少なくとも前=対象、空気や食べ物や運動を要求するのに、なにかその吸引点となるものがあるのではないか。それに母を他者として構成する過程で、未分化の状態から不連続の状態(主体/客体)への移行を画する一連の半=対象、さしずめウィニコットなら「過渡的対象」(objets transitionnels)と呼ぶような対象が存在するのではないか。結局、[母からの]分離の様態には漸次的に推移する階梯、すなわち、乳房の現実界での剥奪、母との関係として与えられる恵与の想像界での欲求不満、最後に〈エディプス〉に記載された象徴界での去勢がありはしないか。つまり、ラカンが見事に定式化したように、つねに「不安の根底を覆い隠し、装いをこらす道具」(『ゼミナール』一九五六-五七年)である限りで対象関係となる階梯が¹³⁾。

先にファルスを原-シニフィアンと呼んだが、これはこの引用で述べられている階梯の最後の「去勢」の段階の開始時点であり、その前に「乳房の剥奪」と「欲求不満」がある。オブジェクトは二番目の「欲求不満」段階のものであり、ウィニコットの移行対象のように、対象(オブジェクト)未満の「前=対象」「半=対象」だというのである。つまり、対象関係論でいうとオブジェクトは自己と対象を両方含んだまま「棄却」された内的対象ということになり、投影同一化された「悪い」対象やベータ要素などにあたるといえるだろう¹⁴⁾。

クリステヴァは、「オブジェクト [abject ab (分離すべく)+ject (投げ出されたもの)] は私と向き合った一つの対象 [ob-jet ob (前に)+jet (投げ出されたもの)]、私が名付ける、あるいは想像する対象なのではない。」と書いている¹⁵⁾。

つまり、オブジェクトがあるのは象徴界(名付ける対象)でも想像界(想像する対象)でもなく、「乳房の現実界での剥奪」に続く欲求不満という現実界に近い位置である。

「乳房の現実界での剥奪」に続く欲求不満という表

現は、ビオンのベータ要素にほぼ該当する。それを鎮めるのが想像界の「想像的父親」であることから、「想像的父親」はアルファ機能と機能的には重なるものだろう。

クリステヴァはオブジェクトのもつ感情を驚づかみにして揺さぶるような激しさを、西洋近代の資本主義制度における父権的な意味づけシステムであると彼女が見なす「象徴界」を揺さぶる力と考えた。ビオンがアルファ機能の逆転やマイナスKによるベータ要素の無秩序な増殖と見たものを、「想像的な父親」という言語活動を可能にする第三項によって破綻を回避しながら、社会の定められた秩序をかき乱す侵犯的な力を持つものとして肯定的にとらえようとしているのである。

クリステヴァは『詩的言語の革命』の中で、言語的な「象徴界」に対して、それを作り替えていく無意識的な作用である「セミオティック」(記号的なもの)について述べている。これはその後のオブジェクトの概念につながるものである。どのようにしてそうした原初的なプロセスの持つ危険と向き合い、「象徴界」にオブジェクトを介入させていけるかを、クリステヴァは『黒い太陽』で、芸術表現と彼女が精神分析家として実際に出会った症例とを平等に、同列のものとして扱いつつ示そうとしている。芸術表現も症例も、前エディプス的な自他の半ば融合した内的対象の世界が、「自分」の居場所を求めてエディプス的な同一性に基づく社会による限界づけを攪乱しているものである。それは幼児期の忘却の彼方から拾い出してきた記憶の痕跡を、何らかの記号表現に向かわせるものなのだ。

これは芸術的なカタルシスに向かうものなのだろうか。クリステヴァはこのことに明確には答えていないように思う。オブジェクトのある種のカタルシスによって鎮めるキリスト教などの宗教の権威が衰退した近代社会においては、芸術的カタルシスがそれにかわるものだと言っているが¹⁶⁾、一方で特にアヴェンギャルドの芸術的実践について、それは昇華やカタルシスではなく「象徴界」への統合以前の不安に向き合うためのものだと言っているからだ¹⁷⁾。

このように、原初対象からの分離という幼児の心の成長に不可欠であるプロセスは、幼児と母親の二者関係のモデルでなく、「父」も含めた三者関係のモデルでも考えることができる。クリステヴァのように考えれば、そのプロセスは単に社会化へと向かうエディプス期の土台を整えるものでなく、現状の社会の枠組みと対立し、それを作り換えていく力として利用でき

るものということになる。

フロイトによれば、エディプス期の同一化と呼ばれているものによって、エスの欲望に由来する不安（去勢不安）を抑える心の装置である超自我が形成される。エディプス期に同性の親との間で起こる葛藤とその処理、いわゆるエディプス・コンプレックスを経て、去勢不安や罪悪感をおさえて他人と競争することが可能になるのである。文学作品や芸術作品はこうした社会化のプロセスを対象化し、「異化」してきた。現代は自我が未成熟な人（特に若者）が増えているような状況であり、社会的価値観も揺らぎ、確固とした支えを見だしにくい状況である。前エディプス的な心の影が社会のそこそこに姿を現しているような状況で、そうした影と向き合い、何らかの道筋を見いだして作業を現代の作家達は行っていると思われる。そのような作品を理解する上で、これまで見てきたような前エディプス期の精神分析理論を生かすことができるだろう。

注

- 1) Norman N. Holland “The Mind and the Book: A Long Look at Psychoanalytic Literary Criticism.” *Journal of Applied Psychoanalytic Studies* 2.1 (January 2000): pp. 13-23.
- 2) パメラ・タイトルの『ラカンと文学批評』（市村卓彦、萩本芳信訳、せりか書房、1987年）にはラカン自身によるポーの「盗まれた手紙」論をはじめとする批評や当時のフランスでの周辺事情などが詳しく書かれている。80年代ぐらいからアメリカでラカンの理論が紹介され、文学研究に使われている。精神科医の斉藤環の『「文学」の精神分析』（河出書房新社、2009年）もラカンを使った文学批評である。これは解説などを集めたものである。
- 3) 実際、ユング派から、ユング理論を自己心理学とつなげて考えようとする試みがいくつも現れている。M・L・フォン・フランツによるサン＝テグジュペリ論である『永遠の少年——『星の王子さま』の深層』（松代洋一、椎名恵子訳、紀伊國屋書店、1982年）は実質的にナルシズムの問題を扱っていると言える。
- 4) オットー・Fカーンバーグ『内的世界と外的現実』（山口泰司監訳、文化書房博文社、2002年）参照。
- 5) ノーマン・N・ホランド前掲論文より。原文は以下の通り。
Today, in the '80s and '90s, I believe psychoanalysis has become a psychology of the self, although there are wide differences in the way different schools address the self: British object-relations, Kohut's self-psychology, or Lacan's return to a verbal psychoanalysis. Various collections of essays use one or another of these familiar approaches:
- 6) Jeffrey Berman, *Narcissism and the Novel* (New York UP, 1990)
- 7) Meredith Ann Skura, *The Literary Use of the Psychoanalytic Process* (Yale UP, 1981)
- 8) Peter L. Rudnytsky ed., *Transitional Objects and Potential Spaces: Literary Uses of D. W. Winnicott*, (NY: Columbia UP, 1993)
- 9) 『フェミニズムと精神分析事典』（エリザベス・ライト編、岡崎宏樹他訳、多賀出版、2002年）の「対象関係論に依拠する批評」という項目参照。
- 10) 堀切直人『日本夢文学志』（冥草舎、一九七九年）では、萩原朔太郎や夏目漱石などの退行的イメージを考察している。一人になった子どもが母を求めるような不安な気持ちを中心に論じており、前エディプス期の問題に目を向けていると言える。パフチーンのプロテスク・リアリズム論などを使いながら情熱を込めて論じているのだが、詰め込みすぎの印象があり、分析は徹底されず散漫になりがちである。
中谷克己『母体幻想論 日本近代小説の深層』（和泉選書105、和泉書院、一九九六年）は佐藤春夫「西班牙犬の家」、萩原朔太郎『猫町』など定番の幻想文学作品を退行の夢として分析している。
- 11) J・F・マスターソン『自己愛と境界例』（富山幸佑、尾崎新訳、星和書店、1990年）p. 22。
- 12) これはクリステヴァが『愛の理論』などで論じたナルシズムの構造と、その隘路を抜けるために不可欠とした「想像的な父親」「先史時代の個人の父親」というものを、対象関係論的な用語に引きつけた説明である。クリステヴァはこの段階は対象と呼べるものではなく、したがって投影同一化も論理的に言って起こっていないと述べている。クリステヴァは投影同一化を自他未分化でなくなった段階に限定して使っているのである。ここでは、投影同一化を広く解釈して対象が自己と未分化の時期における母子交流の鍵であるという、この論文の前半部で説明したような理解で論じている。
- 13) ジュリア・クリステヴァ『恐怖の権力 〈オブジェクション〉 試論』（枝川昌雄訳、叢書ユニベルシタス137、法政大学出版局、1984年）p. 51。
- 14) ただし、クリステヴァは喪の仕事というDポジションで起こることとオブジェをつなげて論じているので、取り入れた「抱える」機能が十分強くなった状態で直面する分離の苦しみを指してオブジェと言っているようでもあり、このあたりは曖昧だ。クリステヴァの『斬首の光景』に出てくる首を切られるというおぞましい絵画は、オブジェに相当すると思う。彼女はそれを抑鬱ポジションの表現であると言っているが、P S的な世界に属するのではないかという感じもする。
- 15) クリステヴァ『恐怖の権力』p. 3。フランス語では(abjet)という単語はないので、(objet)との語呂合わせのためにここでこう書かれているのだが、英語だと「対象」という単語の表記は(object)とcが入るので、(abject)と無理のない語呂合わせになる。
- 16) ジュリア・クリステヴァ『恐怖の権力』pp. 25-26。
- 17) ジュリア・クリステヴァ「意味実践と生産様式」

『記号の横断』（中沢新一他訳，せりか書房，1987年）所収，p. 48。

参考文献

- ウイニコット，D・W・『小児医学から精神分析へ ウイニコット臨床論文集』北山修監訳，岩崎学術出版社，2005年。
- 『ウイニコット著作集3 精神分析的探求3 子どもと青年期の治療相談』倉ひろ子訳，岩崎学術出版社，1998年。
- 特に同書所収論文「精神病と子どもの世話」「移行対象と移行現象」「原初の母性的没頭」
- ウルフ，アーネスト・S『自己心理学入門—コフート理論の実践—』安村直己，角田豊訳，金剛出版，2001年。
- カーンバーグ，オットー・F『内的世界と外的現実』山口泰司監訳，文化書房博文社2002年。
- クリステヴァ，ジュリア『恐怖の権力 〈オブジェクション〉 試論』枝川昌雄訳，叢書ユニベルシタス137，法政大学出版局，1984年。
- クリステヴァ，ジュリア「意味実践と生産様式」『記号の横断』中沢新一他訳，せりか書房，1987年。
- クリステヴァ，ジュリア『女の時間』棚沢直子，天野千穂子編訳，勁草書房，1991年。
- クリステヴァ，ジュリア『詩的言語の革命 第一部 理論的前提』勁草書房，1991年。
- クリステヴァ，ジュリア『黒い太陽 抑鬱とメランコリー』西川直子訳，せりか書房，1994年。
- コフート，ハインツ『自己の分析』水野信義他訳，みすず書房，1994年。
- コフート，ハインツ『自己の修復』本城秀次他訳，みすず書房，1995年。
- コフート，ハインツ『自己の治癒』本城秀次他訳，みすず書房，1995年。
- シミントン，ジョアン，ネヴィル・シミントン『ピオン臨床入門』森茂起訳，金剛出版，2003年。
- バシュラール，ガストン『水と夢 物質の想像力についての試論』小浜俊郎・桜木素行訳，国文社，1969年。
- ピオン，ウィルフレッド『精神分析の方法 I 〈セブン・サーヴァンツ〉』福本修訳，りぶらりあ選書，法政大学出版局，1999年。
- ブロンスタイン，カタリーナ編『現代クライン派入門 基本概念の臨床的理解』福本修，平井正三他訳，岩崎学術出版社，2005年。
- マスターソン，J・F『自己愛と境界例』富山幸佑，尾崎新訳，星和書店，1990年。
- マーラー，M・S他『乳幼児の心理的誕生 母子共生と個体化』高橋雅士他訳，黎明出版，2001年。
- ヤコービ，マリオ『個性化とナルシズム ユングとコフートの心理学』高石浩一訳，創元社，1997年。
- Berman, Jeffrey. *Narcissism and the Novel*. New York UP, 1990.
- Bion, Wilfred R.. *Learning from Experience*. 1962; London: Karnac, 1984.
- Skura, Meredith Ann. *The Literary Use of the Psychoanalytic Process*. Yale UP, 1981.